もう一度、君に恋をする。

天然水いろはす

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

クリスマスイベントが無事に終わり、ゆっくりとした時間が流れるある日の放課後。一人の女子生徒が奉仕部へと訪れる。その女子生徒――和泉風花（いずみふうか）は比企谷八幡の中学時代の同級生であった。久しぶりの再会に和泉風花は喜ぶが、比企谷八幡は苦虫を噛み潰したような顔を見せる。そんな二人をよそに奉仕部の部長である雪ノ下雪乃は彼女に依頼を内容を訊く。

彼女の依頼は、一度奉仕部に深い亀裂を作った『恋愛相談』だった。

→
→
→
→
Ｃｈａｐｔｅｒ　１より　和泉風花を（下手ですけど）描いてみました。

目次

Prologue ―― 1
Chapter 1 ―― 11
Chapter 2 ―― 24
Chapter 3 ―― 38
Chapter 4 ―― 55
Chapter 5 ―― 70

Prologue

「先輩って女の子に告白したことありますか?」

放課後、奉仕部の部室へなんの前触れもなく訪れる一色は来て早々爆弾を落とす。

飲みかけた紅茶を机に勢いよく吹きこぼし、ゴホゴホとむせた。

「ヒッキー、きたないっ!」

「部室の備品を穢すのはやめ――いいえ、よくよく考えてみたらあなたも備品だったわね。備品は備品らしく静かにしてもらえるかしら」

「もう、なにやってるんですか……。よかったら、これ使ってください」

誰がどの発言をしたのか、説明するまでもないだろう。シンプルながら心にくるのが由比ヶ浜で、長ったらしく心に鋭利な刃物が突き刺さしてくるのが雪ノ下で、我が愛しの小町(妹)のように甲斐甲斐しくティッシュを渡してくれるが一色だ。

どうやら俺の周りには味方が一人しかいないようだ。

「助かる」

一色に礼を言い、貰ったティッシュで机を拭き始める。幸いなことに汚れているのは俺が座る正面だけで、雪ノ下達のほうには被害がないようだ。ほんとよかった。マジでよかった。豆腐並みのメンタルがこれ以上削れなくてすんで……。

ゴシゴシ、キュッキュッ、と机を綺麗に拭いて、ふと思う。

そもそもの話、さっきから俺のことをじっと凝視してくるこいつが急に変なことを言ってきたのが原因ではないだろうか。

「それで先輩、告白したことはあるんですか?」

「いきなりなんだよ……」

二度目の問いに今度は無難な言葉を返すことができた。

「もう少ししたらバレンタインじゃないですかぁ。そのことで友達と『誰にチョコを渡すのか』という話題の……ってなんですか先輩その鳩が豆鉄砲を食らったような顔は」

「いや、なに、お前に同性の友達がいたことに驚いてた」

生徒会選挙の一件で、てっきり一色には『ジャグラーばりに手玉にとる男子はいてもバレンタインなどという青春の一大イベント（笑）に向けて話す友達なんていない』と思っていたのだが、どうやら誤解であったらしい。

っつーか、もうバレンタインの季節なのか。一色の話を聞いて思ったけど、小町も学校で友達と『誰にチョコ渡す？』みたいなやりとりをしているんだろうか。小町ももう来年は高校生だし、浮いた話が出てもおかしくない。……お、お兄ちゃんはそんなの絶対に許しませんからねっ!!？

「驚くなんて酷いです。わたしは先輩と違ってちゃんと友達いますよ。先輩と違っていますからね。まったく失礼しちゃいます……」

「ねぇ、失礼なのは君だよ？　大事なことだから二回言ったの？　だいたい俺にも友達いるからね？　戸塚とか彩加とか……あとは戸塚彩加とか」

先程までいつもより少しだけ雪ノ下のほうへ移動し携帯電話を弄っていた由比ヶ浜が呆れた様子でため息を零した。

「それ全部さいちゃんじゃん……。もうヒッキーってば、さいちゃんのこと好きすぎだし」
「ていうか先輩の場合、友達っていうよりも友人ですよね。一人だけですし……」
「一人でも十分多いだろ。だいたい友達ってのは数より質のほうが大事に決まってる」
「言っていることは決して間違いではないのだけれど、言っている人間が間違っているのよね」

ぱたん、と本を閉じる音と共に部室の温度が少し下がったような気がした。

「そういえば一色さん。今日は生徒会の仕事はいいのかしら？」
「いやぁ、その、生徒会の仕事よりも重要な案件が私に舞い込んでおりまして……」

雪ノ下が放つ冷気というか絶対零度に当てられて、一色は体を縮こまらせていた。
その姿を見て、俺はうんうんと頷く。わかる、わかるぞ一色。その気持ちよくわかる。文面だけ見れば普通なのに、雪ノ下が言うと二、三割増して言葉に棘が混ざって聞こえるよな。

今の一色の姿がどうもテストで酷い点数を取ってお袋に怒られているときの小町と被ってしまい、助け船を出してあげたくなる。

「生徒会の仕事よりも重要って、一体なんだよ？」

そう一色に訊くと、よくぞ聞いてくれました！　とばかりに目を輝かせてこちらに振り向く。

「だから、最初から言ってるじゃないですか！　先輩って女の子に告白したことあるんですかっ⁉？」

「なんでそれをお前に言わなきゃいけないんだよ。第一、言うメリットがない」

聞かなければ良かった、と俺は後悔する。

恋バナなんてのは、思春期で浮かれた奴らと勝手にやっていればいいんだ。ぼっちにはハードルが高くて飛び越えらそうにない。

鞄から取り出した読みかけの文庫本に目を落とそうとしたときだった――。

「……本物」

ボソッ、と俺にしか聞こえない小さな声で語りかけてくる彼女に視線を強制的に引き戻される。

（こいつ……）

目的の為ならば手段を選ばない。

人の黒歴史を掘り返そうとする一色はさながら悪魔である。

「だいたい、どうして俺の、その……恋愛事情にこだわるんだ？　由比ヶ浜でも雪ノ下でもいいじゃねぇか」

「えっ、あたし⁉？　あ、あたしは、その……」

まさか自分に話を振られるとは思っていなかった由比ヶ浜が驚いたように声を上げたと思ったら、顔を真っ赤に染め上げた。

伏し目がちに、ちらちらとこちらを覗くような上目遣いを見せるその姿に俺は中学時

代の苦い思い出が蘇る。

あれは確か三年前、放課後の教室で日直の仕事をしているときだ。

『あのね、比企谷君……』

『ん。どうしたの？』

『その、えっと……お昼からね、ずっと比企谷君のこと気になってたんだ』

『えっ、俺のことを⁉？』

『早く言おう言おうって思ってたんだけど、恥ずかしくてずっと言えなくて……』

『う、うん』

『でもね、やっぱり自分の気持ちに嘘をつきたくないから言うね？』

『え……、それってもしかして……愛の告白？』

『え、なに言ってんのそんなわけないじゃん、なに、え、マジキモい。やめてくんない』

『あ、はは。だ、だよなー。ちょっとボケてみた』

『いや、今のないと思う……。——もう終わったし、私帰るね』

『お、おう……』

『——あ、言い忘れてたけどお昼からずっとズボンのチャックが全開だから』

そうして一人教室に取り残された俺は夕日を見ながら涙を流した。しかも、翌日登校してみるとクラスの全員がその話を知られており、男子からは揶揄されて「ナルが谷」と、一部の女子からは軽蔑な眼差しで「変態」と呼ばれる羽目になった。

今思えば、チャック全開のことだけ除けば俺は悪くないはずだ。

あんな頬を赤らめた顔で自分のことが気になっているだなんて言われたら、世の中の単純な男子どもは「こいつ、俺に気があるんじゃね？」と馬鹿みたいに勘違いするに決まっている。

あの出来事を境に、俺は非モテ三原則【（希望を）持たず、（心の隙を）作らず、（甘い話を）持ち込ませず】を心に刻んで生きているのだ。

「……輩、……ですかっ！」

そのおかげで、ぼっち道を極めることになったわけだがそのことに後悔はない。変に勘違いをして黒歴史を作ることはなくなった（ただし、完全になくなったとは言っていない）。

「先輩っ！　さっきからわたしたちの話聞いてるんですか！」

「うぉっ！　――ちょっ、近いから離れろ一色」

不意に肩を大きく揺さぶれて、過去の出来事に浸っていた俺を現実世界へと戻してくれたのは一色だった。

ただ、一つだけ問題を挙げるとすれば……俺のすぐ隣に椅子を移動させて何故か知らんが右腕をがっちりホールドしているのだ。そのせいでぼっちには慣れない柔らかい感触が伝わってヤバい。それと雪ノ下たちの視線がすごく痛い……。あ、問題二つあったわ……。

「嫌です。先輩、こうでもしないとわたしたちの話聞いてくれないじゃないですか」

そう言って、さらにギュッと腕に力を入れる。っておい、それ以上は本当にヤバい。

案外一色って着痩せするタイプなんだなとか、肩にかかる亜麻色の髪からふわりと漂う柑橘系の香りがいい匂いだなとか、――あぁ～、心がぴょんぴょんするんじゃぁ～。

「もしもし、警さ――」

「おい待て。早まるな、話せばわかる」

どういう考えに至ったのか、恐ろしいことに雪ノ下は俺を通報しようとしたが何とか食い止められた。

ただ、耳から携帯電話を離す雪ノ下は心なしか不機嫌そうに見える。

「何かしらデレが谷くん」

「デレが谷ってなんだよ……。全然デレてなんかないからね？」

「そうかしら？　ずいぶんと鼻の下伸ばしていたようだけれど……」

「だよねー。ヒッキー、いろはちゃんにデレデレしすぎだし。あたしにも……って今のなしっ！　もぉっ、ヒッキーの変態っ!!?」

「先輩、わたしにデレデレしてたってホントですかっ!!?」

不機嫌丸出しの雪ノ下に、赤面した顔で罵倒を浴びせる由比ヶ浜に、何故かぱぁっと喜色満面の一色。

三者三様の反応に俺はどうしたものかと困惑していると、コンコンコン、と弱々しいノックの音が静かに奉仕部に鳴り響いた。

Chapter 1

「どうぞ」

先ほどまでの不機嫌そうな顔つきは何処に行ってしまったのやら、雪ノ下は居ずまいを正して扉の向こうにいる人に呼びかける。

「し、失礼しまーす」

緊張しているのか、少し上ずった声で教室の戸を開けておずおずと入ってくる女子生徒に、俺は見覚えがあった。

和泉風花（いずみふうか）。

まだ純粋で素直な心を持っていた中学時代、俺に数々の黒歴史を生み出させた張本人である。

まさか彼女も同じ高校に通っているとは思いもしなかった。

ここは忘れてしまいたい黒歴史を知る彼女に、俺の存在がバレないように特技【ステ

ルスヒッキー】を発動する。

説明しようっ！　【ステルスヒッキー】とは比企谷八幡が小学生の頃からのぼっち生活で自然と身についたステルス機能だぞ！　オンオフと切り替えが可能で、切り替えを忘れると廊下で人とすれ違う際にぶつかっちゃうから注意が必要だぞ！　……断じて、嫌がらせを受けているとかそんなんじゃないんだからねっ！

「あの、生徒のお願いをなんでも叶えてくれる部活があるって噂で聞いたんだけど、……ここがその部活であってるかな？」

「和泉風花さんね。残念ながら、生徒のお願いをなんでも叶えるわけじゃないわ。あくまで奉仕部は手助けをするだけ。願いが叶うかどうかはあなた次第」

「あれ？　私のこと知ってるんだ」

「ええ、彼女からよく聞い――」

「やばい、雑誌で見るよりめちゃくちゃ可愛いんだけどっ！　あの、和泉さん握手してくださいっ！」

ガタガタガタン、と興奮した顔つきで席を立つ由比ヶ浜はあろうかとか和泉に握手を求めていた。

……え、あいつって有名人か何かなの？

気になったので、未だ俺の右腕をがっちりホールドして一色に小声で訊いてみることにした。

ていうか、この子そろそろ離してくれないかな。腕を解こうにもセクハラで訴えられそうで怖くて無理なんだが……。

「なぁ、一色。あいつって有名人かなんかなのか？」

「先輩知らないんですか？　あの人、最近女子高生の間で話題の〝読モ〟ですよ」

「あのいかにも偏差値の低そうな雑誌に載ってるモデルのことか？」

「……先輩、わたしだからいいですけど、結衣先輩がそれ聞いたら『ヒッキー、バカにしすぎだし！』なんて言われて詰め寄られますよ絶対」

「由比ヶ浜のマネか？　全然似てねぇな」

「う、うるさいです。ていうか先輩、さっきから和泉先輩がこっちをチラチラ見てる気がするんですけど……」

「……き、気のせいだろ」

どうか気のせいであってくれ、と俺は願う。

中学を卒業してからもう一年。あと数ヶ月もしたら二年が経つ。

『人生はリセットできないが、人間関係はリセットできる』

何時ぞやの俺が得意としていたこと。

独りでいることが当たり前だと思うようになった俺の数少ない手札で、最善を求めた結果。

人間関係というのは関わらなければ関わらないほど記憶から薄れて、いつかは消えてなくなっていく。

例え、どんな黒歴史でもその原因から距離をおけば、いずれ忘れられるはずだった。

現にドーナツショップで偶然折本かおりと再会するまでは、彼女のことなんて記憶の奥底に打ち捨てられているとばかり思っていたのに。

すんなりと名前が出てきてしまった。

リセットできたつもりで、ふとした拍子で崩れる。

結局のところ、詰めが甘いと言わざるを得なくて、もっと簡単な方法があるにも関わらず怖気ついて中途半端なことしかできない。

知り合いがいないだろうと踏んで、苦手な数学も必死こいて勉強して偏差値の高い進学校――総武高校に運良く合格できたというのに。なんでよりにもよって和泉がいるんだよ。

ああ、俺の目の前に無量小路幽子(むりょうこうじゆうこ)が現れないかなぁ。過去の自分に一度だけメールを送れる権利をくださいホントに。

依然として落ち着かない様子でわーわーキャーキャー、とはしゃぐ由比ヶ浜に雪ノ下はため息をつく。

「由比ヶ浜さん、和泉さんが困っているわ。それに――依頼のほうをそろそろ伺いたいのだけれど」

「あ、ゆきのん、ごめん！　すっかり忘れてた。ふうぴょん、立ち話もアレだし座って座って！」

背中を押され、案内されるがままに依頼人用の椅子に座る和泉は由比ヶ浜の顔を見上げた。

「あ、ありがと……。それとひとつ気になったんだけど〝ふうぴょん〟って私のことかな？」

「うん、そうだよ！　うさぎみたいで可愛いかったから、ふうぴょん！」

「うさぎみたいで可愛い、か……。そんな風に言ってくれる人、周りにいないから嬉しい

な」

そう言って、えへへ、とはにかむ微笑みを向けられた由比ヶ浜は苦しそうに胸を押さえた。

「お……」

お花摘みに行ってくる、とでも言うのだろうか。はぁはぁ、となんだか息遣い荒いし、我慢しないでさっさと行ってきたほうがいいと思うのだが……。

「お持ち帰りしたい」

「「「……は？」」」

由比ヶ浜を除く四人の声が重なった。こいつ、なに言ってんの？　思わずみんなして顔を見合わしてしまう。

その結果、うっかりばっちり目が合ってしまった。

「あ、やっぱり比企谷君だ！　久しぶりだね！」
「……あ、あぁ」

こうなることは薄々わかっていたけど、いざその現実を目の当たりにすると、胸の内の奥底に封印した数々の黒歴史がフラッシュバックするんだなと口元の片方を痙攣(ひきつ)らせながら思う。

「比企谷君もここに通ってたんだね！　知ってる人いないと思ってたから嬉しいな！」
「……あ、あぁ」

微笑みながら話しかけてくる和泉に、俺は壊れかけのロボットのような返事と苦笑いで返すほかかなった。

コレだよコレ。俺を含める中高生男子を勘違いさせる言動は中学の頃から全然変わっていやしない。

ただ、もう馬鹿みたいに勘違いを起こしたりしない。もう和泉の外面にも惑わされたりしない。

俺たちのやりとりを傍らで見ていた一色がひょいと身を乗り出す。その瞬間、ようやく右腕が解放された。若干名残惜しい気持ちもなくはないが、微かに右腕に残る柔らかな感触と温もりが俺の心にほのかな灯(ともしび)を照らしているので良しとしよう。

「えっ、もしかして、先輩のお知り合いですか?」

それは、以前折本と偶然再会した時の陽乃さんの聞き方と酷似していて「……知り合いいたの?」に聞こえるのはどうか気のせいであってほしい。

だからあのときと同じようにベストアンサーで俺は答える。

「中学の同級生だ」

「もう、相変わらずつれないなー。私は比企谷君のことお友達だと思ってたのにー」

言って、和泉はぷくーっとふくれっ面を作って見せる。

側から見たら、天真爛漫(てんしんらんまん)な和泉と無愛想な俺という構図に見えるだろう。

ただし、周りの人間が和泉風花を『劣化版陽乃さん且あざといろはす』ということを知らなければの話だが。

「ところで和泉さん、紅茶はお好きかしら？」
「うん、好きだよ」
「それならよかったわ。これ、どうぞ」

いつの間に電気ケトルでお湯を沸かしのやら、雪ノ下は一色によく使っている来客用のティーカップに紅茶を淹れて和泉の手元に置いた。

「うわぁ～、いい香り～」

ティーカップを口元に近づけて、目を閉じて香り嗅ぐ和泉はそう零す。
透き通るような白い肌とくりくりっとした大きな瞳、それに二つに結んだ色素の薄い青紫色の髪も相まって、どこかのお伽話に出てくるような少女みたいだ。
そんな彼女が「おいしいな」と幸せそうに目を細めるのを見て、不覚にも見惚れてしまった。

「由比ヶ浜さんも一色さんもおかわりはいるかしら？」
「ゆきのん、ありがと！」

「雪ノ下先輩、ありがとうございます～」
「あれ？　俺には……」

雪ノ下と過ごしている時間は一色よりも長いはずなのに、さりげなく除外されることに定評のある俺です。いや、まぁ別にいいんだよ？　中学の頃、クラスの男子とやった王様ゲームで「五番は今すぐ家に帰れ」なんて笑顔で言われて、周りの奴らからも「王様の命令はぜったーい‼？」なんて笑いながら言われたときよりも全然さりげないからいいんだよ？
ただそれでも、忘れ去られることは寂しいので自分もこの教室にいますよーっと雪ノ下にアピールしてみるとため息をつかれた。

「あなた、熱いの苦手じゃない。もう少し待ってちょうだい」

その一言に、衝撃的な事実が発覚する。
もしかして今の今まで、紅茶を淹れられるのが一番最後だったのって俺を思ってのことだったの⁉？
そう思ったら、途端に気恥ずかしくなって彼女から目を逸らす。

「はい、どうぞ。比企谷くん」
「お、おう、さんきゅ。なんか猫舌で手間かけて悪いな」
「悪いと思うなら猫舌なんてやめてくれないかしら。まったく、猫に失礼よ」

相変わらず、猫大好きフリスキーの雪ノ下は変なところで怒ってみせる。

「――それで、奉仕部への依頼はなにかしら」

それぞれの手元に紅茶が行き届くと、雪ノ下が本題を切り出した。
その言葉で本来の目的を思い出したのか、和泉はあっと声を上げる。

「えっと、えっとね、その……」

言いかけて俺の顔をちらっと見る。
前にも、由比ヶ浜が初めてここへ訪れたときもこんなことあった気がする。確かあのときも……。

「比企谷くん」
「あぁ、わかってる」

言って、席を立つ。
女の子同士でしか話せないのなら仕方ない。邪魔者は一時退散するとしよう。

「ま、待って比企谷君っ!!?」

扉に手をかけたところで和泉に呼び止められる。
なんだよ、と振り向きざまに視線で問いかけると彼女は顔を俯かせながら呟いた。

「その、男の子の意見も聞きたいからここにいてほしい……」

依頼人である彼女がそう言うならば俺はただ黙って席に戻るわけだが、なんだか嫌な予感がする。
男女両方の視点から意見が聞きたい。

そう考えたとき、思い当たる節はひとつだけあった。それは一色も言っていたが、あと一ヶ月も経たないうちにバレンタインだということ。

つまり、そこから導き出される和泉風花の依頼というのは――

「えっとね……私、好きな人と寄りを戻したいんだ」

――きっと恋愛相談に違いない。

Chapter 2

「えっとね……私、好きな人と寄りを戻したいんだ」

微かに震える声で紡がれた言葉は、ただひたすらに切実で真っ直ぐな想いは、俺たち――奉仕部に不穏な空気をもたらす。

嫌な予感ほどよく当たるというが、今回ばかりは外れてほしかった。

二度目の恋愛相談。

一度目は戸部翔（とべかける）と海老名姫菜（えびなひなな）による「修学旅行で振られないように、告白し付き合いたい」と「今の関係を維持したい」という二つの相反する依頼だった。同じクラスでも彼らのグループに属さない俺は極論すれば赤の他人と言えよう。だから赤の他人である俺が海老名姫菜に嘘告白をすることで、双方の依頼人に妥協案を暗示させた。

あの修学旅行の一件は解決も、解消もしていない。問題そのものを覆い隠すことで事態の収束を図ることしかできなかった。その場にいた誰もが納得しないことは自明の理であったというのに。

ただ、それでも――。

『……あなたのやり方、嫌いだわ』

『人の気持ち、もっと考えてよ……』

冴え冴えとした月光と青く照らされた竹林、枝葉を鳴らす冷たい風。あのとき、あの場所で彼女たちから言われた言葉が未だ耳に粘りついたまま消えようとしない。

彼女の依頼に私情を挟めば、俺はこんな依頼なんぞ即刻辞退している。

しかしながら、これは俺個人の依頼でなく奉仕部の依頼である。生憎なことにそれを拒否する権限は奉仕部部長である雪ノ下しか持ち合わせていない。

視界に入る雪ノ下はやや困惑したような表情を浮かべていた。眉尻を下げたその姿は、いつもの毅然(きぜん)とした表情を作る顔にはとても不似合いに見えてしまう。

「寄りを戻すって具体的にどうすればいいのかしらね……」

それは和泉に向けて放たれた言葉なのか、あるいは自身に向けて問いかけた言葉なのか。独白にも似たその呟きは静かな空間でやけにはっきりと耳元に届いた。

「もう、ゆきのんったら、それを今からみんなで考えるんでしょ?」

雪ノ下のブレザーの裾をちょこんと摘(つま)んでこの場の雰囲気を明るく取り繕うように笑う由比ヶ浜は、それから、と言葉を継ぐ。

「ヒッキーもちゃんと考えてね！　やっぱりこういうのって男子の意見が結構大事なんだから！」

「そうは言うがな、俺の意見なんて当てにならないだろ……」

生まれてこの方、恋愛という恋愛をしたことがない俺は明らかに力不足だ。

じゃんけんで負けた罰ゲームの告白も、女子が代筆した男子からの偽のラブレターも経験はあるけれど、女子と付き合ったことは一度もないのだ。そんな恋愛経験ゼロとも言える俺が他人の恋愛相談に乗れるわけがない。

やはり俺にはこの依頼は無理だ、と訴えかけるように和泉を見やると、こてんと首を傾げた。

「あれ？　でも比企谷君ってたしか中学のとき結構ラブレター貰ってなかったっけ？」

「先輩に、ラ、ララ、ラブレターッ⁉？」

「ヒッキーに、ラ、ララ、ラブレターッ⁉？」

逡巡せず吐き出された俺の黒歴史は、この狭い教室に奇怪なハーモニーをもたらした。

「和泉先輩、嘘ですよね？　たまに教室に通り掛かったときニヤニヤと気持ち悪くひとりで本読んでる先輩にラブレターなんて……」

「ふうぴょん、嘘だよね？　いつも休み時間とか寝たふりしてたり本読んで笑ってたりしてキモいヒッキーにラブレターって……」

事前に打ち合わせでもしていたんだろうか――。

そう思えるくらいに、一色と由比ヶ浜は息ぴったり俺の心ぐっさりとピンポイントに抉ってくる。もし仮に、これを無意識にやっているんだとしたらお前らスナイパーに転向することをお勧めするぞマジで。

「あ、ははは……、二人とも息ぴったりだね。それにしても比企谷君、中学の頃から全然変わってなくてちょっと安心したかも」

「へぇ、あなたのその気持ち悪い癖って中学生の頃からだったのね。アレ、本当に気持ち

悪いからやめたほうがいいわよ」
「……き、君達さ。さっきから人のことを気持ち悪い気持ち悪いってから言い過ぎじゃない？　ねぇ泣くよ、泣いていい？」

だいたい今の話の流れから察するに、和泉が言った『中学の頃から全然変わっていない』というのはその頃から俺のこと気持ち悪いって思ってたことだろ？　気持ち悪くて安心したとかなんだよ、中二病じゃない材木座は材木座じゃない的なやつなの？　あらやだなんかすごい納得できちゃうんですけどー。

これ以上はもう精神的に堪えられそうになかった。俺の中学時代を和泉の手によって暴露されるぐらいなら、嫌でも彼女の依頼の話を進めて逸らしていくしかない。

冷めてしまった紅茶を口に含んで、喉の調子を確かめるためにゲフンゲフンと咳払いをしてみた。よし大丈夫、問題ない。

いつもよりやや低めの声を俺は意識する。

「っつーか、俺の話はどうでもいいんだよ。今は和泉の依頼をどうするかだろ」
「あら、意外にも乗り気なのね。あなたのことだから、てっきり逃げ出したいとか家に帰りたいとかでも言うと思ったのだけど」

「それには概ね同意だが、依頼人が男の意見も欲しいって言ってるんだから流石にそうもいかんだろ。やるからにはちゃんとやらないとな」
「へぇー、先輩が率先して働こうとするなんて明日は槍でも降りそうですね」
「ほぇ？　いろはちゃん、槍が降るっておかしくない？　今は冬だから雪でしょ普通」

至極真面目な顔で告げる由比ヶ浜に、学年がひとつ下である一色は目を瞬かせた。

「え、え～っと、結衣先輩は『青天の霹靂（へきれき）』という言葉はご存知ないんですか？」
「せ、せいてんの、へ、へき？　……せいへき？」

耳慣れない言葉に由比ヶ浜は首を傾げる。

「……お前、今自分がなに言ったかちゃんと理解してるか？」
「結衣先輩は、今日は下ネタで行くんですか？」
「え、行かないよ!!？　い、今のは……そう！　こ、言葉の綾だからっ！」

顔を赤くして捲し立てる由比ヶ浜に、それまで不躾な眼差しを向けていた一色はやれ

やれと首を振る。

「まぁ、そういうことにしといてあげます」
「いろはちゃん、なんで上から目線なんだし……」
「てゆーか、和泉先輩の寄りを戻したい相手って誰なんですか？」
「あっ！　それ、あたしも思ってた！」

キラキラと、目を輝かせる由比ヶ浜は何処かの文化部部長を務める好奇心旺盛な女の子みたく、今にも「わたし、気になります！」とでも言いそうな雰囲気だ。
ただ、これはあまりに好ましくない。質問する側はなんてことないかもしれないが、答える側は堪ったものじゃない。
誰にだって言いたくないことの一つや二つあるはずだ。
それこそ、恋愛における好きな人というのは心の内にしまっておくべきものなのだ。
うっかり口外してしまった日にはクラス全体に知れ渡って――

『ねえ、聞いた？　比企谷ってさ風花のこと好きなんだって』
『うわー、風花が可哀想（かわいそう）……』

『風花と比企谷って確か同じ図書委員だったよね？』
『もしかしてずっと舐め回すような目で風花のこと見てたりして……』
『流石は変態様ってところだね（笑）』
『――あ、おはよう風花。突然なんだけど風花って比企谷のこと異性としてどう思ってる？』
『……』
『ちょ、風花が真顔とか超珍しいんだけど（笑）』
『どんだけ比企谷のこと嫌なのー（笑）』

――なんていうやりとりを教室の片隅で狸寝入りをしながら、告白もしていないのにフラれることもあるのだ。言ってしまったが最後それをネタに弄られることもままあるし、もしかしたら誰かの好きな人を知るために交換材料として使われるかもしれない。

だから、好きな人を口外するということは相当な勇気を必要とする。

和泉は手元のティーカップに視線を落とした。

「や、やっぱり、言わなきゃダメだよね……」

「いえ、プライバシーもあるでしょうから個人名は出さなくて結構よ」
「雪ノ下先輩、それじゃあ寄りの戻しようがないじゃないですかー」
「ええ、だからそれも踏まえて、どんな人なのか教えてほしいのだけれど」
「まぁ、それくらいなら……」

ティーカップで口元を隠して、ちらりと和泉は目だけをこちらに覗かせる。
やはり中学の同級生が居る手前、個人名を出すのは気が引けるのだろう。

「彼ね、私が今まで会ってきた人の中でほんとにほんとに優しいんだ。私って……見た目がお爺ちゃんお婆ちゃんみたいに白っぽい髪に白人みたいな青い瞳だから幼稚園のときにひどく気味悪く思われていじめられてたの」
「い、いじめっ⁉？」

気にする素振りを見せず重ための過去をぶちかます和泉に、一色と由比ヶ浜は驚いたように声を上げた。
俺も雪ノ下も声を上げやしないものの、驚きで目を見開いていた。

「こんなにうさぎみたいで可愛いのに……。ふうぴょん大丈夫だったの？」
「まぁ、当時は大丈夫じゃなかったけど、結果だけを見ればあのときいじめられて良かったって今は思ってるかな」
「和泉さん、それはどうしてかしら？」
「え、だってあのとき私がいじめられていなきゃ彼にきっと出会えていないと思うから」
「……そういうものかしら？」
「少なくとも私はそう思っていたいかな」

和泉は静かに目を伏せ、過去を懐かしむように微かに口許を緩めた。

「っつーことは、そのとき和泉を助けたのがお前の言う『彼』なのか。すげぇな、そいつ……」

いじめから助けるなんてそうそうできることじゃない。
素直に『彼』を称賛していると、和泉はむすっとした表情で唇を尖らせる。

「でも、彼ってば階段から足を踏み外して当時のこと全然憶えていないんだよね。それ

に久しぶりに会えたと思ったら、それぞれ違った美少女を連れているし……ほんとなんなのかな……」
「ん？　てことはふうぴょんの好きな人ってモデルやってるんだ」
「……え、あぁ、うん。そんなとこかな」

ばつが悪そうに由比ヶ浜から顔を逸らして紅茶を飲む和泉を見て、俺はふっと笑ってしまった。

「先輩どうかしました？」
「いや、なんでもない」

一瞬、外面が剥がれかけたなこいつ……。

「今の話を聞く限りだと、和泉先輩ってその人とまだ付き合ってないですよね？」
「う、うん。そうだよ。あれ、言わなかったっけ？」
「いえ、和泉先輩の言い方だと別れた彼氏と復縁したい的な感じで聞こえたので……」

呆れた様子で一色は言うと、俺をちらりと一瞥する。そしてこほんと咳払いをすると、くるっと身体を俺に向けた。

「ところで先輩、どうでもいいんですけど甘いものって好きですか？」

「葉山ならなんでも喜んで食べると思うぞ」

もう一色の行動原理はある程度把握している。先んじて言うと、一色はつまらなそうに頬を膨らませた。

「いえ、そういうことではなくてですね。今のこの時期に男の人と距離を縮めるなら、やっぱりバレンタインしかないと思っただけですよー」

「いろはちゃん！　それナイスアイデア！」

「口実作りにはちょうどいいし、いいのではないのかしら」

彼女たちの間で具体的な策が決まりつつある中、和泉はゆっくりと弱々しげに手を挙げた。

「わ、私、料理とか全然作れないです……」
「べつに市販のものでもいいとは思いますけど、手作りのほうが男心をぐっと掴めますよ。相手はお菓子作りのこととか全然わかんない男子なんですから手作りのほうがチョロいですよ絶対」
「お前からお菓子貰った男子は可哀想だな……」
「なんか嬉しくない……」
「一色さんってそういう子だったんだね……」

さんざんに言われるとさすがの一色もひよるらしい。ううっと言葉に詰まりながらも、強引に話題を切り替えにかかる。

「まぁ、幸いなことに味見役につご……頼りになる先輩がいるんですから大丈夫ですよ！」
「そうね。都合のいい味見をしてくれる人がここにいるものね」
「雪ノ下。お前が言い直してどうするんだよ……」

まぁ、味見することには特に反対はない。

ただ、和泉が由比ヶ浜みたいに暗黒物質（ダークマター）を錬成する子ではないことを俺は祈るばかりだ。

「あのさ、比企谷君……」

「なんだ？」

見ると和泉は制服の胸元のリボンを握っていた。緊張しているのか、きゅっと唇を結ぶ。上気した桜色の頬を隠すように、潤んだ瞳が俺を捉えた。

目が合ったせいで俺まで緊張してくる。

なにか絞り出すように、和泉は小さく糸のように細い声で囁（ささや）いた。

「そ、その……つ、付き合ってくれないかな？」

「……お、おう」

勿論それはお菓子作りにですよね？　本当にまったく言い方気を付けてくれないかなぁ……。

Chapter 3

無機質な電子音が鳴り響く。

ぼんやりと目を覚ますと、カーテンの隙間から漏れる光が朝であることを知らせてくれる。

日差しの眩しさに目を細めながら、俺は未だに喧しく鳴り続ける目覚まし時計を止めた。

時刻は七時三〇分。

いつもならまだ寝ている時間だが、今日は和泉と一色と奉仕部で出かけることになっている。なんでも和泉が作りたいお菓子をまずは探しに行こうとの話らしい。

どうして土曜日という休日に奉仕部の部員として外出しなければならないのだろうか。

こと比企谷家では完全週休二日制を採用している。だから、休むといったら休むのだ。ただ、問題は奉仕部が週休二日制であるという点である。完全週休二日制と週休二日制は別物なのだよなぁ。将来働かざるを得ない人は必ず求人情報によく目を通したほうがいいことをお勧めする。つまり、奉仕部的には依頼と言われてしまえば土日だろ

うと祝日だろうと稼働やむなし感がある。

っつーか、それよく考えてみれば週休二日制でもないじゃねぇか。なんなのこのブラック部活は……。

重い身体に鞭を打って、起き上がるため毛布をめくろうとしたとき、僅(わず)かに開いた隙間から冬の冷気が侵入した。あまりの寒さに、思わず毛布にかけていた手が離れる。

「うわっ、さみぃ……」

そう零してしまうほどに寒かった。再び毛布を勢いよく頭から被り直し、深く深く潜り込む。

本当に困ったものだ。

この時期の布団って結構ツンデレなんじゃないかと思う。朝とか今みたいに「一緒にいてくれないかな……」って離してくれねぇし、それに夜は布団に入るときなて「もぉっ！　私を一日ほっといた君が悪いんだからねっ！」って感じに冷たい。でも冷たいんだけど、しばらく一緒にいるとすぐに暖かく接してくれるなかなかに可愛い奴なんだ。まぁ、奴といっても相手は無生物なんだけど……。

閑話休題。

たしか千葉駅に一〇時集合だったはずだから、約束の時間までまだ準備し始めるのに余裕がある。どれくらい余裕があるかというと、だいたい三〇分くらいある。

つまり、それくらいの時間を有していれば二度寝を決め込むことができるのだ。

再び夢の世界へ旅立とうと目を閉じかけたとき、枕元にある携帯電話の振動する音がした。俺は仰向けの体勢からぐるんとうつ伏せになって、相手を確認する。

ディスプレイには『☆★ゆい★☆』の文字。由比ヶ浜だ。以前、登録されたときにスパムメールの差出人っぽい名前で一時変えようか迷ったが、結局面倒でずっとそのままにしていたのだ。

それにしてもこんな時間になんだろうか。もしかして、今日の予定は中止になりましたっていう連絡だったり……。

俺は僅かな期待を込めて通話ボタンを押し、携帯電話を耳に当てる。

「あ、やっと出た。もう遅いよ！」

「……わ、……りぃな」

寝起きのせいか、思うように呂律が回らず擦(かす)れた声を出してしまうと、電話越しにふっと小さな笑い声が聞こえてきた。

「ヒッキー、もしかして今起きたばっかり？」
「ふわぁあ……。まぁな、今日なにも予定がなければ二度寝どころか三度寝、四度寝を決め込んでたんだが」
「もう、それはいくらなんでも寝過ぎだし。ていうか、ヒッキーって平日とか教室来るのよくギリギリだけど朝弱いの？」
「んー、朝が弱いっつーかこの時期の朝がダメで起きれないな。寒すぎて、今も布団にくるまってる」

再び出ようとする欠伸を噛み締めてそう答えると、電話の向こうで息を呑む音がした。

けれど、少し間が空いても喋り出す気配がない。

もしかして通話の不調か？　と思ったがこんなときの対処方法を俺は心得ていない。誰かと携帯電話で通話することなんて小町以外にあんまりないし、それに小町とだって基本メールのやりとりだ。

どうしたものかと考えてていると、ふとディスプレイの一番右上に表示されるアイコンに目がいく。物は試しだと思い、スピーカーモードに切り替えると同時――。

「じゃ、じゃあさ。学校ある日はあたしが毎日その……お、起こしてあげよっか？」
「……へ？」

予期せぬ言葉に俺は素っ頓狂な声が出た。

「あ、や、やっぱなんでもない！」
「そ、そうか……」

電話越しだから相手の顔は見えないけれど、今頃由比ヶ浜はなにかを誤魔化すようにお団子髪をくしくしと撫でているんだろうな、と勝手ながら思う。
それにしても由比ヶ浜に起こしてもらえたらきっと……。

『おっはよー！　ほーら起きて起きて！』
『……』
『ちょっと待ってよぉ、どーしてまた寝るのー？』
『あと……五分……』

『もぉ、仕方ないなぁ。五分だけ待ってあげるね』

――そして五分後。

『えっへへへ……やっと起きたね、おはよー』

『……お、おはようさん』

うん、ヤバいな。なにがヤバいって、先日アニメ化されたラノベの主人公とヒロインのやりとりを俺と由比ヶ浜で当てはめて妄想している所がもうヤバい。

なんだかむず痒くなり、布団から起き上がってカーテンを開ける。今日は冬晴れのいい天気だな。

「それで、こんな朝からなんの用だ？　もしかして今日の予定は中止になったのか？中止になったんだろ？」

「なんでそんな嬉しそうに聞いてくるし……。言っておくけど、中止にはなってないからね」

「だったら、なんだよ？」

「え、えっとさ……。ゆきのんといろはちゃんは今日来れないらしいの」

由比ヶ浜に事情を訊くと、なんでも雪ノ下は家の用事で、一色は平塚先生に生徒会のことで呼び出されたらしい。

雪ノ下はともかく休みの日まで生徒会長として学校にいかなければいけない一色って結構可哀想だな。

「てことは、今日は俺と由比ヶ浜と和泉の三人になるってことか？」

「じ、実は……あたしも今日急に親戚の子どもの面倒を見ないといけなくなっちゃって無理なんだ。ほんとごめんっ！」

まさかの由比ヶ浜もドタキャン。

雪ノ下も一色も無理で由比ヶ浜も無理。つまり、それが指し示す答えを俺は否応なしに突きつけられる。

「――あ、思い出した。俺もアレがアレでアレだから行けそうになかったわ、うん」

人間誰しも嫌なことから目を背け、回避しようとする。咄嗟に口から出た言葉がそれを如実に物語っていた。

「……ヒッキーがそう言うときってなにもないときだよね。小町ちゃんからそう聞いてるよ」

小町ぃ……。お前なに勝手に人の断り文句をバラしてんだよぉ……。

ため息混じりに俺の逃げ道を塞ぐ由比ヶ浜は、それに、と言葉を続ける。

「ふうぴょんにもさっき電話して聞いてみたんだけど、今月は今日しか時間が取れないらしいんだって」

「いや、だとしてもだぞ？　お菓子作りなんてやったことない俺一人じゃあ絶対役に立たないこと間違いなしだからな？」

「大丈夫。今日一番大事なのは男子からの意見だから、むしろヒッキーにしかできないことだよ。だから頑張ろうよ？　ね？」

駄々をこねる子どもを宥(なだ)めるかのような優しい声音に、これ以上間接的に否定の言葉を並べるのは憚(はばか)られた。

「……まぁ、依頼だしやるだけやってみるわ」
「ほんとに今日はごめんねヒッキー。それじゃあ、休み明けの月曜日にまたね！」
「おう。またな、由比ヶ浜」

言って、向こうが通話を終えたのを確認してから電話を切る。暗くなった画面に薄らと映る瞳は、いつも以上にどんよりと濁らせていた。

（今日は和泉と二人きりか……）

中学の頃ならば学校一の美少女……一部の間で天使と呼ばれていた彼女と二人きりで、ましてやプライベートで出かける展開は学校中の男子全員が一度は望んだことであろう。

勿論のことながら学校中の男子全員という括りに俺も含まれていたが、中学二年の委員会決めで彼女と同じ図書委員になって認識が一変した。

彼女――和泉風花は美少女だ。そこは認める。

……がしかし、純粋な男子の心を弄ぶし、パーソナルスペースという名のぼっちの固有結界をあっさりと破ってくるしで天使と呼ぶには些か微妙である。天使と呼ぶより

は堕天使、もしくは小悪魔と呼んだほうがしっくりくる。
一年の時を経ても彼女への苦手意識は変わらず、今日の俺は上手くやっていけるだろうかと不安が募るばかり。
とりあえずお腹がぐぅぅっと音が立てたので、朝食を取ろうとリビングへ向かうことにした。
扉を開け自室を出ると、ちょうど隣の部屋から小町が寝ぼけ眼を擦って出てきた。
「ふわぁ～……あーお兄ちゃん。おはよー」
「おう、おはよう小町。やけに今日は眠そうだな」
「まぁね。ちょっと昨日、数学でわからないところがあって遅くまで勉強してたから……」
再び大きな欠伸をする小町の目の周りが、薄黒く隅どられていることに俺は気づいた。
「……あんまり無理すんなよ？　体調崩したら元も子もないからな」

二月一四日は、世間一般でいうバレンタインデー。女の子が好きな男の人にチョコレートを渡して想いを伝える日だ。

しかし、その日は同時に高校入試、小町の試験日なのである。

「心配してくれてありがとね。でも、お兄ちゃんと同じ学校に行きたいからやっぱり頑張らないと。――あ、今の小町的にポイント高い♪」

「……最後のがなければな」

言って俺は所々寝癖が跳ねた小町の頭をわしゃわしゃと撫でた、というよりはかき混ぜた。

（俺も最後の一年を小町と過ごせたら嬉しいよ）

こんなこと口にしたらきっと小町に負担を与えてしまうから、この言葉は胸の奥にそっとしまっておく。

今の俺にできることはせいぜい、なるべく小町に迷惑も心配も気苦労もかけないようにすることぐらいだ。結構多いな、おい。

「ところで、小町は今から朝飯か？」
「うん、そうだよ」
「それなら昨日の残り物にするか？　それともパンにする？」
「う～ん、朝は軽めがいいからパンにする。……ていうかお兄ちゃんが準備してくれるの？」

意外そうな顔で見上げる小町に、俺は撫でていた手を離す。

「いつも小町がやってくれてるんだから、たまには俺がやったっていいだろ？」
「ほぇー、お兄ちゃんにしては珍しい……」
「そゆわけで先に朝飯の準備しておくから、お前はその酷い寝癖を直してこい。めっちゃ乱れてるから」
「半分はお兄ちゃんにやられたものなんだけどなぁ～」

跳ねた寝癖を確かめるように、小町は髪を押さえながら階段を上がろうとする。
だがその間に。

「あ、そうだ小町。聞き忘れてたけど飲み物なににする？　ちなみに俺はコーヒーだけど」
「それじゃあココアでお願い。それもミルクたっぷりのやつ」
「りょーかい」

腹が減っては戦もできぬってよく言うし、俺も腹ごしらえをして万全を期しますか……。

朝飯の準備といってもパンをトースターで焼くだけだし、飲み物に関しては電気ポットでお湯を沸かすだけだから特に大変なことはない。

やはりというべきか、早々に準備が終わり手が空いてしまった。小町は寝癖直しに苦戦しているのかまだ来ない。さすがに先に食べ始めるのはアレなので炬燵（こたつ）に足を突っ込み、テレビの電源を入れる。

『あともう少しでバレンタイン！　女性のみなさんは準備をし始めていますか？　今日はいろいろなチョコレートやレシピを紹介したいと思いますっ!!?』

そんなニュース番組のバレンタイン特集に、思わずチャンネルを変えた。
しかし、チャンネルを変えた先でもバレンタイン特集、バレンタイン特集、バレンタ……ってどの番組も似たようなことしかやってないじゃねぇかっ‼?
嫌がらせかっとリモコンを投げ捨てようとした。それとほぼ同じタイミングで、がちゃりとリビングのドアが開く音がする。
どうやら小町が来たらしい。

「どしたの? そんな腐った目でテレビなんか睨みつけたりしてさ」
「いや、なに、世間のみなさんが頭の中ピンク一色すぎてな……」
「あー、たしかにもうそんな時期だもんねぇ。お兄ちゃんは今年誰かにチョコ貰えそうなの?」

俺同様に炬燵に足を突っ込んで、小町は出来上がったばかりのパンにジャムを塗ったくりながら聞いてくる。まったく、わかりきったことを首を傾げながら聞くんじゃない。可愛すぎるだろ……。

「あのな、チョコを貰えるかどうかなんて小町が一番よくわかってるだろ……」

「けど、お兄ちゃん。誰宛かわからないゴディバのチョコを中学三年間貰ってたじゃん」

小町の何気ない一言にパンに伸びかけていた手が止まる。

そういえば、そんなことあったな。チョコに詳しくない俺でも知る有名店。高級チョコと聞いて小町と半分こにして食べてたなぁ……。小町も喜んで食べていたし、くれた奴には感謝しているけれど……。

「まぁ、あれはイタズラかなんかだろ。机の中にあったチョコを見つけたとき俺の反応を、きっと楽しんでいたに違いない」

「……はぁ、お兄ちゃんどうして素直に受け取れないのかなぁ。だいたいイタズラ目的で高級チョコをくれるわけないでしょ、この……ごみいちゃん」

「っておい。炬燵の中で足を蹴るな」

文句を言うと、向かい合わせに座る小町は食べる手を止めた。

「……あのさ、お兄ちゃん。たまには素直になったほうが色々といいことがあると小町思うのですよ」

そう言って、小町はいつもより大人びた顔で微笑む。俺を見上げる眼差しはまっすぐで優しくて、温かい。

そんな視線が気恥ずかしく、俺は目を逸らす。すると、小町も照れくさくなったのか勢いよく残りのパンを食べて、ごくごくとココアを飲み干した。

「それじゃあ、小町はまた勉強してくるであります！　それとお兄ちゃん、外へ出かけるようなら帰りにコンビニであのちょっと高いプリンが食べたいなー……なんて」

言いたいことだけ言って、小町はがちゃりとドアを開けてたったったと階段を降りていく。

（素直に、か……）

俺は慌しい妹の背中を見送って、再びテレビに視線を移す。

『第一位はみずがめ座のあなた！　気になるあの人と急接近する出来事が起こるでしょ

う。そんなあなたの今日のラッキーアイテムは伊達眼鏡。そして最下位はしし――』

最後まで見ずにテレビの電源を切り、ぬるくなってしまった甘ったるいコーヒーを苦々しい表情をしながら飲み干した。

……やっぱり今日はいいことがない気がする。

Chapter 4

冬晴れの土曜日。やはり休日だけあって千葉駅前は人で活気づいていた。

待ち合わせに指定された場所は千葉駅東口前の柱である。素敵なことにこの場所は某妹アニメの聖地だ。ちょっとした気分で気軽に聖地巡礼ができる千葉ってほんと最高だと思います。

駅前を行き交う人を横目に、時間を確認すれば九時三〇分。

約束の時間より少しばかり早い到着。べつに女子と二人きりのお出かけだから、浮かれて早く来すぎたわけでははい。

女の子を待たせるな、と可愛い我が妹からの教育に従っただけのこと。

それにしたって、三〇分前行動はちとやりすぎなんじゃないかと思う。社会人でも五分前が基本なのに、その倍以上の行動が求められるなんて時間外労働にも匹敵するだろ……。

いくら晴れているとはいえども、この時期の吹きつける風は冷たい。

俺は風の当たらない位置に移動し、柱に寄りかかって目を瞑る。こんなことならもう少し重ね着をしてくるべきだったと若干後悔した。

「あーあ、私もあんな彼氏欲しいなぁ……」
「理想高すぎだって……。あんなモデルみたいな人と付き合うには、やっぱりそれなりに釣り合ってないと無理でしょ」
「あー、たしかに連れている女の子めっちゃ可愛かったもんねぇ。私もあんな小動物みたいに、もしくはもう一人の小悪魔系女子？　みたいに可愛くなれたらなぁ……」
「あんたの場合、小悪魔というより小ぶ……とりあえずダイエットしろダイエット」

すると、耳に入ってきたのはそんな女子二人組の会話。
モデルと聞いて一瞬だけ和泉のことを頭に思い浮かべたが、話を聞く限りだとモデルみたいなのは男性らしい。それで、彼氏が欲しいと言った奴は小豚らしい。ちょうどうでもいい。
待ち合わせ場所に早く来といて今更だが、俺は待つという行為が正直苦手だ。
例えば、自分という物語が一回完結を迎えてしまったように感じる信号の待ち時間。
例えば、気が遠くなるような『〇〇分待ち』と書かれたなにかの行列店。
例えば、今自分が置かれているこの状況。
例を挙げようとすればキリがなくて、この生産性のない時間が無駄に思える。

「はぁ……帰りてぇ……」

『時は金なり』っていう言葉が世界に広まっているぐらいなんだから、この無駄にされた時間に対価が支払われてもいいんじゃなかろうか……。

「帰られたら困るんだけどなぁ」

「っ⁉？」

ふと出し抜けにかけられた甘い声に、俺はぎょっと顔をあげる。

そこには、俺の顔を覗き込むように見上げる和泉の姿があった。

「ごめん、待ったよね？　ちょっと準備に手間取っちゃった……」

前を開けた黒いダウンコートにハイネックの白いニット。ベージュのスカートの丈は長めで、見るからに暖そうで大人っぽい印象を受ける。

それに今日は中学のときから見慣れたツインテールじゃなくて、前髪に青いヘアピン

をつけて髪を下ろしていた。
雪ノ下と東京わんにゃんショーで会ったときも、由比ヶ浜と花火大会に行ったときも思ったが、制服姿じゃない女の子っていうのは反則にも程がある。
なにが反則って、いつもと違う一面にドキッとさせられる可愛さにだ。
ドギマギする気持ちを抑えつけて、なんとか言葉を絞り出す。
「い……いや、全然待ってねぇから。ていうか和泉、お前って普段はコンタクトだったんだな」
「え、あぁ、これ伊達眼鏡だよ？　今日は気分的にかけてみようかなって……どう、頭よさそうに見えない？」
言って、和泉は眼鏡のブリッジを中指でくいくいっと押し上げた。
以前……といっても二週間前ぐらいの出来事だが、雪ノ下の誕生日プレゼントを選んでいるときに由比ヶ浜も同じようなことを言っていたっけな……。
眼鏡＝頭よさそうっていう発想が既に頭が悪く思えるが、和泉は由比ヶ浜と違って頭がいい。中学のときなんて常に定期考査で首位を維持していたぐらいだ。
今はどうなんだろうと気にはなるけど、それ以上に俺は和泉の背後から生暖かい眼差

しを向けてくる見知らぬ二人のことが気になっていた。

「そんなことより、後ろにいる二人は知り合いかなにかか？」

我慢できず口に出すと、何故か和泉は「ふん」とあからさまに不機嫌な顔をした。

「茉奈（まな）さん、行こ」

「――ちょっ、ふうちゃんっ⁉？」

そして俺を睨みつけるとぷいっとそっぽを向いて、後ろにいた茶髪の綺麗な女性の手を引っ張って歩き始める。

（え、えええ……。今、和泉を怒らせるようなことなんかしたか……？）

原因がわからずに困惑していると、もう一人のすらっとした細身のイケメンと目が合った。

今度は呆れた目で俺を見ている。

「君さ、アレはさすがにないんじゃない？　女の子と出かけたことあんまりないでしょ」
「そうですけど…っていうかどなたですか？」

雰囲気からして年上っぽいので失礼がないよう敬語を使う。

「あぁ、自己紹介がまだだったね。僕は成瀬裕介（なるせゆうすけ）、風花とは仕事で知り合った仲だよ。それとさっき風花に手を引っ張られて連れ去られたのが友達の柏木茉奈（かしわぎまな）ね」
「あ、え、えっと俺はひき――」
「比企谷八幡くん、だろ？　君のことは風花からたまに職場で聞いているよ」

人に名を訊ねるときはまず自分から……、そんな子どもでもわかる当たり前のことを忘れて、慌てて吃りながらも名乗ろうとするがその前に遮られた。
どうやら俺は成瀬さんに知られているようだ。それもきっと悪い意味で……。

「和泉の奴、きっと俺の悪口とか言ってるんでしょうね……」

初めて会った相手に自分の黒歴史とか中学の出来事とかを知られたと思うと、今すぐに誰もいない遠い地へと逃げたい気持ちに駆り立てられる。

そのまま行方知れずになりたいくらいの気分で答えると、成瀬さんは大きく目を見開いた。

「え、なにを言ってるんだい？　悪口なんて言ってないよ。むしろ、風花は八幡くんのこと……」

途中から声が小さくなって聞き取ることができなかったけど、和泉に悪く言われていないようで俺はほっと安堵の胸を撫で下ろす。

っつーかこの人、今さりげなく俺の名前呼ばなかった？　会ってすぐに名前呼びとかフレンドリーすぎるだろマジで。

「ところで、和泉と柏木さんを見失っちゃいましたけど……帰っても大丈夫ですかね？」

「いやいや、なんでそんな自然に帰宅しようとしてるの！　普通ここは探しに行こうとか携帯に連絡しようとか思わないわけ⁉？」

「いや、だって俺、和泉の連絡先知らないわけですし……。それに今日は和泉の予定に付

き合わされる予定でしたけど、成瀬さんたちと一緒にいたのでどうやら俺は用済みっぽいじゃないですか……」

あーほんと残念だなー。残念すぎて足が勝手に帰路につこうとしてるわー。

「こら八幡くん、そう言って帰ろうとしない！」
「ちょっ、腕離してくださいっ！」
「僕が連絡するから大人しくしてて！」

成瀬さんが俺の腕を離さず語気強めに言うものだから、さらにここが人の流れが多い駅前ということもあって、周りを行く人々が皆足を止めてこちらを見ていた。
所謂人だかりが俺たちの周りにできていた。

「え、なになに揉め事？」
「いや俺も今来たばっかりだからあんま知らないけど、腕掴まれてるゾンビみたいな奴がなんかやったらしいぜ」
「ゾンビみたいってお前……、アレは明らかにグールだろ（笑）」

「お前こそよく見ろよ。あの目の腐り具合……絶対ゾンビに決まってるだろ」
「た、たしかに……ヒィッ!!?」

――た、たしかに……、じゃねえーよっ!!?　なに冷静に納得してんだ。あと、ちょっと目が合ったぐらいで悲鳴上げんなアホ。
偶然耳に入った中学生くらいの男子どものやりとりにツッコミを入れていると、再び腕を引っ張られる。
見れば、ちょうど成瀬さんが携帯電話をポケットにしまっているところで。

「それじゃあ、行こうか」
「行くって何処へですか?」

まるでモーゼの十戒の如く、人だかりの割れた中を悠然と歩く成瀬さんの背中に問いかける。
既視感を覚えた。

（こんな光景……前にも一度何処かで……）

歩みが止まった。そして、成瀬さんが振り返った。

「片割れのガラスの靴を履かせに、灰かぶり姫がいる場所へかな」

「は、はぁ……」

この人いきなりなにを言い出すんだろう……。

なんの脈絡もない発言に俺は首を捻る。もし成瀬さんの口振りが真剣でなかったら、一笑を付したいところだ。

けれど、こちらを見据える成瀬さんの瞳の奥にある翳りが、いい加減なことは許さないと訴えかけてくる。

ガラスの靴……と聞いて連想されるのは、小さい頃に読み聞かせであった『シンデレラ』という女性が主人公の童話。

意地悪な継母や義姉たちから召使いのように扱われる毎日の主人公であったが、舞踏会で王子に見初められて結婚するというサクセスストーリー。

それで、ガラスの靴は『シンデレラ』の作中で登場する魔女から与えられたものだ。成瀬さんの言う「灰かぶり姫」っていうのは聞いたことないけど、きっと主人公の名前の

言い換えたものなのだろう。
今までの経緯から考え得るに、「灰かぶり姫」は和泉もしくは柏木さんのどちらかを指していることは理解できる。ただ、そもそもの大前提として何故こんな回り諄(くど)い言い方を成瀬さんがするのかいまいち腑に落ちない。

「――すまない。今のは忘れてくれ」

哀しげな目をしていた。しかし、それも一瞬のこと。
なにごともなかったかのように歩き出す成瀬さんに、俺はほんの少しだけ距離を空けてついて行く。

「それとさっき茉奈ちゃんに電話して場所を訊いたら、この前オープンしたばかりの〝うさぎと遊べるカフェ〟に今いるそうだよ」
「あーそのお店、今日テレビで紹介されてたから知ってます。なんでもチョコが安くて美味しいって評判良いらしいですよ」
「へぇ、チョコが美味しいだ。テレビとかあんまり見ないから知らなかったよ……ってどうして八幡くんは僕の後ろを歩いているのかな?」

成瀬さんは突然きょろきょろとし出して、後ろにいる俺を視界に捉えるや否や疑問をぶつけてくる。そして歩調が緩まり、俺の横を並んで歩く。

「どうしてって言われても、後ろのほうがなにかと安全だからとしか」

主に俺の精神的安全であるが……。

「その言い方だと、前を歩く僕は危険ってことだね？」

「いえ、そ、そういう意味じゃ……」

「ははは、冗談だよ冗談。一人のほうが気楽で他人に迷惑かけないで済むってことだろう？」

「……」

ちゃんとわかっているさ、とでも言いたげな面持ちで肩に手を置く成瀬さんはちっとも『ぼっち』という生き物の扱い方をわかってないです、はい。取り扱い説明書でも作って差し上げようかしら……。

和泉と同じ職種の成瀬さんはやはり彼女同様、周囲の視線を集めていた。道行く女性の大半が立ち止まり、振り返る。

決して俺自身に向けられたものでないことは理解しているが、視線の量に気持ち悪さを覚える。思わず顔を顰めてしまった。

「でもさ、」

ちらりと横顔を窺うと、目が合う。

「安全な場所にいてもなにも変わらないよ、むしろ衰退する一方だ。そんなの辛いじゃないか。……だからほんの少しでいいから風花に歩み寄ってくれないかな」

「……えっ、なんでここで和泉が出てくるんですか」

前触れなく挙げられた名前に面食らった。本当になんで彼女の名前が今出てくるか理解できない。首を傾げて言うと、成瀬さんはふっと笑った。

「まあ、それは八幡くん自身で考えてよ。そうじゃなきゃ意味がないからね」

なにやら楽しそうに、満足そうに、軽快な足取りで成瀬さんは小洒落た雰囲気の小さな木造店舗に向かって歩いていく。

ふと見上げると、そこには――。

『Ｒａｂｂｉｔｓ　Ｃａｆｅ』

と所々に可愛らしいうさぎの模様が刻まれた看板が、入り口の前にぶら下がっていた。

どうやら目的地に着いたようだ。てっきり今朝テレビで話題になっていたものだから行列でもできていそうだなと思ったけど、並んで待っている人はおらず空いてるっぽい。

「ああ、そうだ。八幡くん」

先ほどから意味のわからないことを言う成瀬さんが、お店へ入る前に足を止めてこちらを見る。

「人生のちょっと先輩からのアドバイス。――女の子と出かけるときは必ず最初にファッションを褒めること！　わかった⁉？」

「イ、イエッサーッ‼？」

青褪(あおざ)めた表情で若干震えながら言う成瀬さんに、俺は気迫の篭った返事と共にようやく最初の和泉の不機嫌になった原因に辿(たど)り着く。

（……ていうか成瀬さん。あなたの身になにがあったんですか）

訊きたくても怖くて訊けなかった。

Chapter 5

ちりん、ちりんと鈴の音が耳に響く。
店先に吊るされた来店を知らせる涼やかな鈴の音をきっかけに、小さなうさぎが何匹か俺たちに向かって近寄ってきた。
うさぎと触れ合えるカフェというだけあってやっぱり人間慣れしているんだなぁ、と当たり前なことを思う。
ぴょんぴょん、ぴょんぴょん……すりすり……。
ふと足元にこそばゆさを感じ視線を下ろすと、小さな動く白い毛玉……じゃない白うさぎが頭とかお尻とかを足に擦りつけていた。
（なにこの可愛い生き物ぉ……!!?　やばいやばすぎるんですけどぉ……!!?）
あまりの可愛さに語彙力が喪失する。
以前文化祭の打ち上げで戸塚（とつか）が「うさぎは可愛い」と言っていたが、今この瞬間より俺はうさぎ派に加わることを心に固く誓う。

今度、戸塚を誘って来ようかな。勿論、二人で。次こそはアイツに邪魔されることなく二人きりで。大事なことなので二回言いました。

「あはは、八幡くんは人気者だね」

「いやいや、成瀬さんのところにだって……」

言いかけてやめる。

成瀬の近くにうさぎは一匹もいないというわけじゃない。二、三匹寄ってくるうさぎはいる。

だが、いずれも成瀬さんがしゃがんで手を伸ばそうとすると、決まって噛みついては俺の側に寄ってくる。

「はぁ、なんで僕のところには来ないんだろ……」

「ま、まぁそういうことも、あ、ありますよ」

不憫でならないその姿に居た堪れず、俺は先にカウンターへと向かった。

「いらっしゃいませ～。何名様でしょうかぁ？」

まどろみを誘うような心地よさのある声で女性の店員さんはそう訊いてくる。

この質問に対して、俺は答えに窮した。

和泉がいるからと言われて成瀬さんに連れて来られただけで、べつにこのカフェに用があるわけではない。むしろ、なにもない。

第一、俺は和泉と待ち合わせ場所に集合してからの予定をなにも知らないのだ。ざっくりとしたことは由比ヶ浜から聞いて知っているが、それ以外のことは本当になにも知らない。

「あ、え、えっと……」

「すいません。待ち合わせなんです」

なんて言えばいいかわからないまま口を開くと、横から口を挟まれた。

突然のことに驚いて声の主へと振り向くと、そこには茶髪の綺麗な女性……、もとい柏木さんがいた。

「そうでしたか。それは失礼いたしました」
「いえいえ、お気になさらないでください。……それじゃあ八幡君。こっちだよ」

助けられておいて思うのもアレだが、柏木さんも俺のこと名前で呼ぶんですね……。いや、まぁ誰がどんな呼び方をしようがべつにいいんだけどさ、それでもいきなり名前呼びは心臓に悪いからやめてほしい。

「あの、さっきはありがとうございました」
「いいのいいの、気にしないで。それより、裕介さんは？　一緒じゃなかったの？」
「あー、あの人ならあそこに……」

指差して、柏木さんの視線を後ろに促す。
指の先に見えるのは、変わらずしょんぼりと項垂れる成瀬さんの姿。うさぎに相手にされないことがそんなにショックだったんですか……。
すると、背後から深いため息が聞こえた。

「ごめん、ちょっと先に言ってて八幡君。二階のほうにふうちゃんがいるからさ」

「あっ、はい。わかりま――」
「それともう一つ。女の子的にやっぱり男の子とデートしたときはオシャレしていることを褒めてほしいものだよ♪」

ぱちりとウインクを残し、柏木さんはこの場を後にする。

「べ、べつにデートじゃないんですけど……」

しゃがんで成瀬さんと目線を合わして話す彼女を横目に、俺は独りごちた。
成瀬さんにも言われたけど、そんなに女の子の服装を褒めるという行為は大事なのだろうか。
これは俺の主観でしかないけど、そういうのって恋人や好きな人に言われたら嬉しいものであって、興味関心のない人から言われても全然嬉しくもなんとも思わないと思うんだ。
だいたいギャルゲー主人公じゃあるまいし、それに「現実で最初に服装を褒める男のほとんどが体目当てだ」って前にネットで見た覚えがある。
和泉にとってモブでしかない俺がもし仮に「今日のその服、似合ってるな」と言おう

ものならば、「ぐへへへ、食べちゃいたぜ☆」って翻訳されるわけだ。そんなこと微塵も思ったことがないのにだ。……もう変態じゃん。イエローカード通り越してレッドカードじゃん。

詰まるところ女の子の服装を褒めるという行為は、ゲームだから許されることで、現実でやったら絶対相手を不快な思いにさせるに違いない。

（……だとしたら、和泉はなんであのとき不機嫌になったんだ？）

再び、振り出しに戻る。

頭の中で疑問符が乱舞しているうちに、ついにやってきてしまった。

二階は木製の低いテーブルが並んでおり、うさぎがぴょんぴょんと駆け巡る。どうやら一階が普通のカフェで、こちらが本格的なうさぎとの触れ合い場のようだ。

ちらほらと子ども連れの家族や若い人たちがうさぎに餌をやって戯れている中、ある一点において決定的に異なるテーブル席に目が入る。

（な、なんだ、アレは……）

ちょうど窓側の一番奥の席。テーブルの上に白とか茶とか黒とか……いろんな色の毛並みのうさぎたちがピラミッドのように積み重なっていた。
あんなことありえるのか、と目を擦ってもう一度確認する。
が、何度見ても異様な光景は変わらず、むしろどんどんとピラミッドは大きくなっているような気さえした。
そういえば、和泉は何処にいるんだろうか。
柏木さんはここにいると言っていたが、見渡す限りあの人目を引き寄せる容姿の彼女は何処にも見当たらない。

（も、もしかして……）

そこでふと、俺は再び一番奥のテーブル席へと目を向ける。
じっと目を凝らして見てみると、うさぎのピラミッドのちょうど天辺に透明感ある青紫色の髪がゆらゆらと揺らいでいた。
あんな特徴的な髪色……見間違えようはずもない。
一応念のため、別のまったく知らない人の可能性も考慮して、音を立てないよう静かにゆっくりと歩く。さながら忍者の気分だ。ニンニン。

あと五メートル。この距離でようやくこちらにお尻を向けたうさぎの丸くて可愛い尻尾の輪郭がわかった。

あと三メートル。うさぎのピラミッドの一番上に鎮座する白うさぎがビクッと体を震わせた。

じりじりと着実に距離を詰めてあと一メートル。そこに一歩足を踏み入れた途端にまるで不穏な気配を感じ取ったかのように、一番上の白うさぎが下にいるうさぎたちを足場にして、力強く跳び俺の横を素早く駆けていく。

そして足場にされたうさぎたちはというと、いきなり上から重力をかけられたものだからバランスを保てずにピラミッドの形を崩していた。

その結果――。

「あ」

パシャリ、と自撮り棒で写真を撮っていた和泉の携帯越しに視線がぶつかった。

「……ひ、比企谷君、これはその……違うのっ！」

今日会ってすぐの不機嫌な様子と打って変わって、和泉はあわあわと手を意味もなく動かして慌てふためく姿に俺はまたも首を傾げる。

だがしかし、これは千載一遇のチャンスなのではないだろうか。ここで上手い返しができれば今日という日をなんとかやり過ごせる気がする、と俺は直感的に悟った。

ただそこで問題になってくるのが、どんな風にして返すかだ。

「なにが違うんだ？」

これは流石に愚直すぎるから却下。

「違う……？　なにが違うんだい？　ほら、言ってごらん？」

これも却下。だいたい普段こんな口調じゃないから違和感ありすぎる。ていうかこれ最初のやつとほぼ同じ内容だし、それに言い方がなんかゲスい。

……。

（……ああ、もう！　なんかねぇのか。こう、なんかいい感じの言葉がっ‼？）

碌な案しか思い浮かばず、ガシガシと頭を掻き毟る。
これ以上の沈黙はあまりよろしくない。なにか口にしなければ。

『……あのさ、お兄ちゃん。たまには素直になったほうが色々といいことがあると小町思うのですよ』
『人生のちょっと先輩からのアドバイス。――女の子と出かけるときは必ず最初にファッションを褒めること！　わかった⁉？』
『それともう一つ。女の子的にやっぱり男の子とデートしたときはオシャレしていることを褒めてほしいものだよ♪』

焦りの中、頭をよぎるのは小町と今日初めて会った人たちの言葉。
素直になる。ファッションを褒める。オシャレしていることを褒める。素直に。褒める。褒める。……素直になってとりあえず褒める。
それぞれの言葉が頭の中にリフレインし、俺はとある答えに行き着く。
これならいける、むしろこれ以外にないだろという謎の自信を覚えて俺は口を開いた。

「眼鏡姿の和泉も新鮮でいいけど、やっぱり中学の頃から見慣れてる眼鏡かけてない和泉のほうが可愛くて好きだなぁ」

「なななななな‼?」

効果覿面(こうかてきめん)だった。和泉は顔から湯気がぼしゅっと噴き出して真っ赤になり、大慌てで口元を隠して、勢いよくこちらに背を向けた。

「いま、は……くん私のことかわ、……ってそれに……って‼?　っ!　こうし……いっ!」

なにやらぼそぼそと呟いているようだが、早口すぎて全くと言っていいほど聞き取れない。

「ご、ごめんっ。ちょっと私、お手洗いに行ってくるね!」

「お、おいっ。和泉、ちゃんと前を向かないと危ないぞ……って聞こえてないよなアレ……」

そして、いきなりガバッとこっちを振り返ったと思えば、和泉は下を向いてトイレへと駆け出した。さすがに店内を走るなんていう危険行為に注意を促すが、俺の声など耳に入っていないようだった。

とりあえずは素直に思ったことを、当初の和泉の伊達眼鏡に対しての感想を述べたのだが、なんだかんだ勢いに任せて言ったものだから自分自身なにを言ったかすらよく覚えていない。でもあの様子から見るに声は明るかったし、たぶん上手くできたんじゃないだろうかと思う。

ほんの少しの達成感に浸っていると、和泉とすれ違いに成瀬さんたちがやってきた。成瀬さんたちは俺を見るなり驚いた様子で肩をぽんぽんとそれぞれ叩いてくる。

「……って二人してなんですか。急にどうしちゃったんですか」

「いやぁ、八幡くん。僕は君がやればできる子だって信じていたよ！　まさかあの風花をあそこまでさせるなんてね」

「うんうん。わたしもビックリしたよ。八幡君って奥手そうに見えて意外に積極的だったんだね！」

嬉しそうに話す二人を見て、いまいち状況が掴めなかった。一体なんのことを言ってるんだこの人たちは……。

「あ、あの本当になんのことですかね？」

言うと時間が止まった。

時間が止まったというのは勿論比喩なのだが、その比喩が冗談ではないほどに周辺一帯が物音一つなく静まり返っていた。

「ねえ、裕介さん。この子、本気で言ってるのかな？」

「どうだろう……。でもあんな台詞を人前で堂々と言ってるからさすがに覚えてるでしょ普通……」

「あのさ……、八幡君。ここでわたしたちに会う前に、ふうちゃんに言った言葉って覚えてる？」

「和泉に言った言葉ですか。それなら、お二人に言われた通り服装について褒めた気はしますけど、正直なんて言ったか覚えてないですね」

柏木さんに問われて答えると、二人してまた顔を見合わせて今度はぽんと優しく肩を叩かれた。

「……まぁ、こういうのって本人の自覚が大事だからね」

「……はぁ、ふうちゃんの道のりは長そうだなぁ」

成瀬さんと柏木さんは呆れ半分諦め半分といった感じで俺を見てくる。だから、なんなんですか気になるんですけど……。

「とりあえず、僕たちは今日予定していた映画でも観に行くとして、あとは若いお二人で楽しんでもらおうか」

「ちょっとぉ、若いお二人って……わたしはまだ裕介さんと違って高校生だよ？　でもそうするのが一番だよね。ちょっとふうちゃんに伝えてくる」

「うん、お願い。僕は外で待ってるから」

同じ場所にいるのにこの疎外感はなんだろう……。

「――そういえば、成瀬さんたちって和泉と出かける用事があって一緒にいたわけじゃなかったんですね」

一つだけ確認したいことがあって訊いてみると、成瀬さんはきょとんとした顔で答えた。

「ああ、風花とは道端で偶然会って行くところが同じだったから一緒に居ただけだよ。あれ、言ってなかったっけ？」

「まぁ、言ってはいないですけど、俺に言う義理もないんでべつにいいですけど……」

ただ、あのときもし成瀬さんがそのことを言ってくれたら、余計な勘違いなんかしないで済んだのにと少し思ってしまうだけだ。

「それじゃあ、僕はもう行くよ。茉奈ちゃんに外で待ってるって言っちゃったし……またね八幡くん」

「……またです成瀬さん」

遠ざかる成瀬さんの背中を見送ることなく、俺はテーブルについた。初めての人と長い間話すことが想像以上に緊張したのか、ため息がこぼれる。

なんとなく窓の外を眺めると、ちょうど成瀬さんと柏木さんが駅のほうへと歩いていくのが目に見えた。しかも、手なんか繋いで仲良さげだ。

（さっきの会話といい、一階での柏木さんの成瀬さんへの接し方といい、やっぱりあの二人って恋人同士なのかなぁ……）

もうすぐバレンタインで、男女が手を繋いでいる光景に苛ついたわけでも羨ましいと思ったわけでもないが、これだけは窓ガラス越しで聞こえないかもしれないけどもラブコメの神様に向かって言わねばならなかった。

「リア充爆発しろ」